

日本医療薬学会第53回公開シンポジウムを平成26年7月26日(土)に、長崎大学医学部記念講堂で開催した。テーマは「患者を支えるチーム医療・地域連携：一歩進んだ薬剤師の関わり」とし、特別講演として2名の先生にご講演いただき、4名のシンポジストに各種領域のチーム医療についての講演の後、総合討論を行った。

シンポジウムには、127名が参加し、県別では長崎県86名(学生12名含む)、県外41名(福岡21名、佐賀7名、熊本6名、大分3名、鹿児島2名、愛知1名、群馬1名)であった。職種別では、病院薬剤師95名、薬局薬剤師14名、大学教員6名、薬学生12名であった。九州だけでなく本州からも広く参加者があり、各種薬学関係者が参加したシンポジウムとなった。

特別講演Ⅰとして、長崎大学病院 精神科神経科 教授 小澤 寛樹先生に「認知症疾患医療センターにおけるチーム医療の役割」と題してご講演いただいた。その中で医療に関する映画などでは、実際とは異なる状況が描かれる事が多いが、「明日の記憶」では若年性認知症の症状が忠実に描かれ、参考になる映画であることも紹介された。ご講演では認知症の病態に関する事から認知症の診断方法、認知症治療薬の使い方、そして長崎大学病院における「認知症疾患医療センター」では、薬剤師の力が重要であることが述べられた。特別講演Ⅱは、九州大学大学院 薬学研究院 教授 家入 一郎先生に「遺伝子情報に基づいた個別化薬物療法の展開 ―現状と展望―」と題して、遺伝子変異による代謝酵素の活性の差が、治療効果や副作用発現率に大きな差につながることを膨大なデータでご説明いただいた。今後、遺伝子検査を行い、各患者に応じた治療が必要となることが予想され、その際薬剤師の積極的な治療介入が期待されることをご講演いただいた。

特別講演の後、各種領域のチーム医療のシンポジウムが開始され、1人目の熊本総合病院薬剤部 上淵 未来先生からは「がん患者指導管理料に対する取り組み」と題して、今年の診療報酬改定で新たに加わったがん患者指導管理料3の算定のために、院内で行っている取り組みについて、具体的な内容を説明していただいた。2人目は長崎県薬剤師会 手嶋 無限先生より「地域ぐるみの在宅支援における薬剤師の取組」と題して、地域医療の中で在宅患者への関わりを具体的な事例を示しながら、講演していただいた。3人目は、小倉記念病院薬剤部 福島 将友先生に「小倉記念病院における集中治療領域での薬剤師の関わり」と題して、集中治療室に配属され、戸惑ったことや苦勞したことなど臨床現場の実際について紹介していただいた。最後の長崎大学病院薬剤部 中川 博雄先生には「チーム医療および地域連携における感染制御に関する薬剤師の役割」と題して、感染制御に関する薬剤師の取り組みの具体例としてエビデンス構築の例を示していただきながら、研究の重要性についてご講演いただいた。

最後に総合討論を行い、各シンポジスト同士の意見交換および会場からの活発な質疑応答が行われ、盛会のうちにシンポジウムの幕を閉じた。